豊崎小

主体的に学びに向かう子の育成

～思いや考えを表現し、学び合う学習活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　久保　　亨

１　研究主題について

本校では、教育目標として「たくましく生きる子」を、知の努力目標として「自分の考えをもち、学び合う子」を掲げている。また、今年度は学校目標を「学びに向かう力を伸ばす」と設定し取り組んでいる。その具現化のため、一昨年度から研究主題を「主体的に学びに向かう子の育成」、昨年度から副題を「児童が自ら取り組む働きかけの工夫を通して」として、授業のみの関わりだけではなく、普段から児童が自分で考え、行動する習慣がつくことを大切にしながら、研究を進めてきた。

昨年度は、児童の思考の流れに即しながら、興味・関心を高めたり、考える必要感がある課題提示や発問の工夫を継続して行ってきたことで、主体的に課題解決に向かう姿が見られた。また、ねらいを明確にした、教師や児童同士の関わりを通して、内容や形態、思考の可視化に取り組んだことで、自分の考えをもち、学びに向かう力の育成につながった。そして、日常において児童が自ら取り組む働きかけの研究と実践を積み重ね、共有することで、児童が自分の考えを大切にし、行動に移せる力の向上が見られてきた。

しかし、課題として、指示や提案をされてから動くのではなく、児童が自ら考え、行動に移せる力をより発揮できるようにしていく必要があること、自分の考えをもち、より学ぶことを楽しめるよう、課題設定の在り方や単元の見通し、児童に応じた友達との関わり方や教師の支援の仕方等について、さらに研究していく必要があることが挙げられた。

そこで、今年度は、一人一人が自分の考えをそれぞれに表現することができるようにするための授業づくりについて、さらに研究を深めることにした。そして副題を「思いや考えを表現し、学び合う学習活動を通して」と変更し、児童が主体的に考え、友達と学び合う中で自分の考えを広げることによって互いの学びを深めさせていきたいと考え、本主題を設定した。

自分の考えをもち、主体的に学びに向かう「たくましく生きる子」を目指して、研究を進めていきたい。

２　研究のねらい

主体的に学びに向かう子の育成のためには、児童が思いや考えを表現し、学び合う学習活動を行うことが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童が思いや考えをそれぞれに表現しながら、学び合う学習活動を推進することによって、進んで課題を発見して粘り強く解決に取り組んだり、友達とよりよい考えや方法を求めたりするなど、主体的に学びに向かうことができる。

４　研究内容

(1) 自分の考えをもち、深める手立ての工夫
(2) 知的好奇心を高め、考える必要感がある課題提示や発問の工夫
(3) 学びを深め、次への意欲を高める振り返りの工夫
(4) 児童が自ら取り組む日常的な働きかけの研究と実践

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
6	１７	教育指導課・総合教育センター訪問 第１回授業研究　５学年　道徳　「手品師」 授業者　松生　章乃　（要請訪問） 指導助言：八戸市教育委員会　教育指導課　大野　勉主任指導主事
9	２０	第２回授業公開　６学年　国語　「やまなし」 授業者　花田　貴光
１０	２５	第３回授業公開　２学年　国語　「どうぶつ園のじゅうい」 授業者　福田　智恵子
１１	１６	第４回授業研究　１学年　図画工作　「おもいをつたえよう」 授業者　濵田　真弓
１１	２９	第５回授業公開　３学年　算数　「分数」 ４学年　算数　「小数のかけ算やわり算」 授業者　木村　允一

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	２５	一人一台端末活用法 講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事
8	２３	一人一台端末活用法 講師　八戸市旭ヶ丘小学校　佐々木　俊介　教諭

6　研究の成果

(1) 考える必要感がある課題提示や発問の工夫によって、児童は主体的に取り組むことを授業を通して学ぶことができた。また、課題意識をもたせるために、視覚化の工夫、考えたくなる発問について研修を深めることができた。
(2) 本時の内容に関わる既習事項の掲示、前時の学習内容の想起、教具や図の掲示等を意図的に行うことは、問題解決の見通しをもつことができ、主体的に学びに向かうことに効果的だった。
(3) まず自分の考えをもち、立場をはっきりさせ、さらに友達と意見交流をすることは、表現したいという意欲を高めることに効果的だった。
(4) それぞれの学年で発達の段階に応じた振り返りができた。「わかった」「次にやりたい」「疑問」などを書くことで、児童は自分の到達度に気付き、教師は本時の定着度を図る手立てとなった。

7　研究の課題

(1) 考える必要感のある課題提示や発問の工夫をすることにより、児童に考えをもたせることはできたが、知的好奇心を高めたり考えを深めたりすることにつながったかどうかを検証する方法を考える必要がある。
(2) 発達の段階を考慮した、振り返りの系統表を作成するなどし、次への意欲を高めるための振り返りとしていく必要がある。
(3) 少人数学級や複式学級における、効果的な学習の進め方について研修をしていく必要がある。

（記入者　松生　章乃）